

ヒヤリングアート NEWS LETTER

Vol.17
2025. Autumn

オーティコン補聴器 (デマント・ジャパン)

さいとう とおる 齋藤 徹 社長 インタビュー

“補聴器は、決して特別なものではありません。
それは人生をより楽しく、豊かにするためのツールです”

そう語るのは、オーティコン補聴器 (デマント・ジャパン株式会社) 代表取締役社長の齋藤 徹さん。海外での豊富なキャリアを経て補聴器業界に飛び込んだ齋藤社長に、業界への想いや会社の理念、そして日々の中で大切にしていることについて伺いました。



左: ヒヤリングアート 代表 園原 裕将 右: デマント・ジャパン 齋藤 徹社長

これまでのキャリアと補聴器業界に携わるようになったきっかけは？

大学卒業後、日系精密機器メーカーで営業職としてキャリアをスタートさせました。その後、シンガポールに8年間駐在し、アジア太平洋地域のビジネスを担当。10カ国以上から集まった100人以上の部下をまとめる中で、自分のコミュニケーションスタイルを確立しました。帰国後、自分のキャリアのステップアップを目指し、40歳で転職を決意。その後、ご縁がありデマント・ジャパンに入社しました。

初めて補聴器業界に携わった時の印象は？

正直なところ、当初は補聴器についてほとんど知識がなく、少しネガティブなイメージを持っていました。しかし、実際に入社してみるとその印象は大きく変わりました。↗



補聴器のイメージ
をネガティブから
ポジティブへ！
一人ひとりに最適な
聞こえを届けたい！

補聴器にはAIが搭載されるなど高度な技術が詰め込まれており、その先進性に驚かされました。

さらに、ユーザーの方から「スリッパの足音が聞こえて嬉しい」「ゴルフの打球音が聞こえるのが楽しい」といった声を聞き、補聴器が人々の生活の質を劇的に向上させる力を持っていることを実感しました。社会貢献度が高く、技術的にも最先端を追求する奥深い業界だと知り、最初のイメージは完全に覆されました。

オーティコンはどのような理念を持つ会社ですか？

1904年にデンマークで創業し、120年以上の歴史があります。創業者が難聴の奥様のために始めたという背景があり、「難聴者の人生をより良く変えたい」という想いが会社の核です。

特に大切にしているのが「**脳で聞く(ブレイン ヒアリング)**」というコンセプトです。私たちは人が自然に音を聞き分けるメカニズムを研究し、脳への負担を減らして自然な聞こえを実現する技術を開発しています。そのため、補聴器の心臓部である半導体チップも自社で設計し、技術の精度と独自性を追求しています。

今後の補聴器メーカーとしてのチャレンジは？

補聴器について、私がかつて抱いていたようなネガティブなイメージから脱却させることです。…(次のページに続く)→

私たちは、補聴器をつけてコンサートや落語を楽しんでもらうイベントを開催したり、テレビ番組やインターネットを通じて、補聴器を「ポジティブなツール」として紹介する情報発信を行っています。

次に課題となるのは高性能モデルの価格です。より良い聞こえを提供しようとする高額になりがちで、この点を改善していきたいと考えています。

そして、一人ひとりに最適な調整（フィッティング）を行える専門家の育成です。専門知識と技術を持つ人材があってこそ、本当に満足いただける「聞こえ」を届けられる。この分野にも力を注いでいきます。

社長ご自身は、人とのコミュニケーションで意識していることはありますか？

「社長」と呼ばれるのは、あまり好きではないんです。どうしても堅苦しくなってしまいますからね。できるだけ気さくに接するようにしていて、社員や関係者とはチャットツールを使ってフランクにやり取りしています。もっと気軽に声をかけてもらえると嬉しいですね。(笑)

日々のルーティーンはありますか？

毎朝5時過ぎに起きて、まず洗濯物を畳みます。地味な作業ですが、無心になれるこの時間に会議のアイデアや新しい企画がふと浮かぶことが多いのです。さらに週に2回ほど通うスイミングでも、頭を空っぽにして泳ぐうちに良いひらめきが生まれます。

補聴器ユーザーや検討中の方へのメッセージは？

補聴器というとネガティブなイメージを持たれがちですが、「聴こえる」ことは人生を楽しく、豊かにしてくれます。今の補聴器は高性能でスタイリッシュ。ぜひ活用して、毎日をより明るく前向きに過ごしていただきたいです。



左：ヒヤリングアート 代表 國原 裕将 右：デマント・ジャパン 齋藤 徹社長

社員や周囲の人と、普段から気軽に話せる関係をつくっています。

齋藤社長は真剣に業界への想いを語りながらも、時折笑顔でご自身のことも話してくださり、とても気さくなお人柄が伝わってきました。貴重なお話をありがとうございました。

おすすめ補聴器ご紹介

オーティコン史上最高の聞こえを、小さな補聴器へ

オーティコン「Own SI」は、一人ひとりの耳に合わせて作るオーダーメイド補聴器。目立ちにくい小さなサイズ、優れた音質、1日中快適な装用感を兼ね備えた耳穴型補聴器です。軽度から重度までの難聴に幅広く対応し、毎日の生活を快適にサポートします。

オーティコン Own(OWN) SI

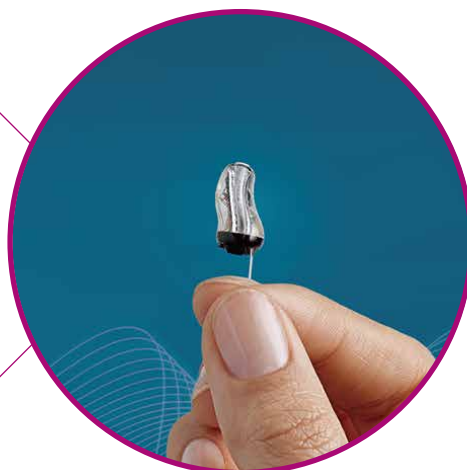
Point 1 周囲360°の音を明瞭で自然に！

AIがDNN技術を使用し、周囲360°の音を分析。瞬時に人の声や生活音を聞き分けて、快適で自然な聴こえを実現します。

※DNN：AIが音の特徴をとらえて学習・判断するための仕組み

Point 2 急な音環境の変化に即応！

静かな場所から人混みへ移動するなど、周囲の音が急に変わっても素早く調整し、細部までクリアに聞こえます。



ベージュ ブラック

※その他、豊富なカラーバリエーションやタイプがございます。お気軽にお問い合わせください。

oticon
life-changing technology

ミュージシャン・イベントプロデューサー

しもぞの ひろあき

下園弘明さんインタビュー

70年代、フォークソンググループ「火の鳥」のメンバーとして音楽活動をスタートして以来、音楽とともに歩み続けてきた下園弘明さん。プロダクションの経営や歌声喫茶イベントの企画など、幅広い分野で活躍してきました。その原点にはいつも、「人と音楽をつなぐ」という一貫した想いがあります。「人の心に深く刻まれた音楽は、時間が経っても色褪せず、その時代を蘇らせてくれます」と下園さんは語ります。今回は、下園さんの人生と音楽への情熱、その歩みを伺いました。



左：ヒヤリングアート 代表 園原 裕将、右：下園 弘明

音楽を始められたきっかけは何ですか？

高校時代に先輩から声をかけていただいたのが最初です。大学に入ったころは学生運動の影響で授業が少なく、音楽に集中できる環境がありました。そこで本格的に活動を始め、70年代にはフォークソンググループ「火の鳥」のメンバーとして歌っていました。

「火の鳥」を脱退した後、自分の音楽性を大切にするために「ジュン・ジュン」というデュオを結成しました。リードボーカルを担当し、シングル3枚とアルバム1枚をリリースしました。

会社経営もされていたのですか？

1984年に関西でのコマーシャル音楽制作の経験を生かし、仲間と「アトム84」を設立しました。演奏からイベントまで幅広く手がけ、バブル期にはPRイベントや花博など大規模案件にも携わりました。しかし、バブル崩壊と阪神淡路大震災で取引先を失い大打撃に。それでも音楽を止めたくない一心で「アトムブラザーズ音楽出版」を立ち上げ、新たな一歩を踏み出しました。

歌声喫茶の再現とはどういうことですか？

昔の歌声喫茶を、今の時代にもう一度蘇らせるということなのです。私たちの世代より少し上の人たちが若い頃に楽しんでいた文化で、京都・河原町にあった『炎（ほのお）』なんかは修学旅行生が立ち寄るほどの人気でした。その雰囲気をもう一度体験していただきたいと思って企画しました。

ライブも笑いが溢れてるって本当ですか？

ええ、そうなんです。僕のライブでは、歌と同じくらいトークも大事にしています。曲の合間にユーモアを交えたり、お客さんをいじったりすると、会場が笑いに

包まれるんですよ。最初は静かに聴いていた方も、気づけば笑顔でリズムをとったり口ずさんだり。最後には全員が一緒に楽しむ空間になっている。歌って、笑って、声を合わせる。それが僕のライブの醍醐味ですね。お客様から『コンサートというより同窓会みたい』と言われたこともあります（笑）。

ライブをやっているうれしいことは？

やっぱりお客さんの笑顔ですね。ある時、娘さんがお母さんを連れてきてくれて、最初は緊張していたお母さんが、帰り際に『ああ、今日は来てよかったわ〜』と笑顔で言ってくれました。そういう声を聞くと、「やっていてよかったなあ」と心から思いますね。

補聴器についてはどう感じていますか？

園原さんに教えていただいて知ったのですが、今の補聴器はとてもおしゃれで自然につけられるのですね。聴こえを気にせず一歩踏み出して音楽を楽しんでいたのは嬉しいことですし、私もそうあってほしいと願っています。いずれ自分がお世話になる時が来ても、園原さんがいてくださると思うと心強いです。

最後にこれからの目標は？

これからも音楽を通じて人と人を結びつけ、社会に貢献していきたいと思っています。歌は世代を超えて人をつなぎます。その力を信じて、これからも活動が続けていきます。



下園さんはライブハウスアビリーンで定期的にライブを開催しています。詳しくはホームページをご覧ください。

アビリーン



アビリーンHPはこちら



abilene.jp

万博2025 レポの旅

大阪・関西万博2025に行ってきました。

会場に広がっていたのは、進化したテクノロジーや新しい発明、そして持続可能な未来社会のビジョン。

AIや宇宙開発、環境にやさしい建築、異文化が調和するデザイン。そんな未来がもう目の前に迫っていることを実感。熱気あふれる会場は、ワクワクが尽きない体験の連続でした。



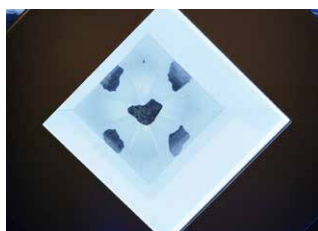
東ゲートから会場に入り、まずは公式キャラクター・ミyakumyakにごあいさつ。記念写真をパチリと撮って、冒険の始まりです。最初に目の前に広がったのは、圧倒的なスケールの「大屋根リング」。マップを手に取り、お目当てのアメリカ パビリオンへ向かいます。

アメリカ パビリオン スパークと宇宙の旅

アメリカ パビリオンは長蛇の列。でも退屈はしません。建物前の広場には巨大スクリーンが設置され、待ち時間もまるでショーを楽しんでいるかのよう。館内に入るとさらに引き込まれて、巨大な映像空間に包まれてロケットに乗り込んだような感覚に。



アメリカ パビリオン



月の石

ガイド役は、かわいい星のキャラ・スパーク！歌ったり飛び回ったりしながら「Together! Together! 一緒に行こうよ!」と来場者を未来の旅へと誘ってくれます。気がつけば目はずっとスパークを追ってしまい、宇宙の物語に引き込まれていました。そしてクライマックスは本物の「月の石」。1972年のアポロ17号で持ち帰られた37億年前の玄武岩。小さな石ですが、宇宙のロマンと歴史の重みを感じました。

世界を旅するように

次に訪れたのはマレーシアパビリオン。外観は約5,000本の竹を編み込んでつくられていて、リボンのようにしなやかに重なり合い、やさしく美しい印象を放っていました。

香ばしい匂いに誘われてドイツ館のカフェで一息。ドイツビールとソーセージは、歩き回った後の最高のご褒美です。

その後、ブラジルやスイス パビリオンも巡りました。スイスパビリオンではアルプス文化と最先端技術が融合した展示が印象的でした。

夜空を彩るドローンショー

締めくくりは、大屋根リングの散歩とドローンショー。1,000機以上のドローンが、夜空を自由に舞い、文字やキャラクターを描き出します。まるで未来都市のような光景に、誰もが息をのむ瞬間。

「世界はひとつにつながっている」そんなメッセージを胸いっぱいを感じながら、未来を先取りした一夜が幕を閉じました。



ドローンショー



ライトアップされた大屋根リング

補聴器のヒヤリングアート

ヒヤリングアート豊中補聴器センター(本店):06-6848-4133

ヒヤリングアート池田補聴器専門店:072-751-3341

ヒヤリングアート高槻補聴器センター:072-683-4133

ヒヤリングアート茨木補聴器センター:072-634-4133

営業時間:10:00~18:00(ご予約優先) 休日:水・日・祝【全店 認定補聴器技能者 常駐】

ミュージック カフェ & バー アビリーン TEL: 090-8643-4133

豊中市岡町北1-1-5 ラークスパ 2F(阪急岡町駅前) <https://abilene.jp>

ヒヤリングアート株式会社
大阪府豊中市岡町北1-1-15 1階
<https://www.hearingart.co.jp>

Hearing Art
ヒヤリングアート

ABILENE
MUSIC CAFE & BAR

ヒヤリングアート
HPはこちら



アビリーン
HPはこちら

